

日本語談話の省略解釈に与える母語の影響 : 中国語母語話者と英語母語話者を対象として

著者名(日)	森谷 浩士
雑誌名	言語科学研究 : 神田外語大学大学院紀要
巻	15
ページ	25-49
発行年	2009-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00000944/

日本語談話の省略解釈に与える母語の影響

—中国語母語話者と英語母語話者を対象として—

森谷 浩士

Native Language Influence when Processing Japanese Discourse

要旨

母語でのインプット処理方略が、第二言語 (L2) のインプットに対しても利用されるという仮説 (Processing strategies transfer) は、文レベルで検証されてきたが、Tao & Healy (1996, 1998, 2005) はL2 談話処理においても母語の処理方略が利用されると報告している。本稿では初級日本語学習者 (中国語母語話者5名、英語母語話者10名) を対象に、母語の談話処理方略がL2である日本語の談話処理でも利用されるか否かを検証した。日本語談話の特徴である「省略」に着目し、学習者の省略解釈のプロセスを探った。省略を含む文章を読み、省略要素を特定するタスクと、省略のある文章と省略要素を復元した文章を読み、読みやすさに違いがあるかを判定するタスクの二つのタスクを実施した結果、共に異なる母語話者グループ間で違いがみられた。この結果は、Tao & Healyの研究結果を支持し、L2 談話処理レベルでも母語の処理方略が利用される可能性を示唆するものである。

キーワード：処理方略の転移、談話処理、省略の解釈、L2日本語学習者

1. 背景

一般に、談話能力とは、語や文といった小さな単位ではなく、複数の文を一つのまとまりとして理解したり、産出したりする能力のことであり、Communicative Competence の構成要素の一つとして考えられている (Canale & Swain, 1980; Bachman, 1990)。具体的には、目標言語文化のレトリック構

造の理解・産出や指示関係の理解・産出などが必要であると考えられている。日本語談話の場合、英語などのような多くの場合で代名詞の使用が義務的な言語と異なり、一度、談話に導入された名詞句が、後に続く文では省略されることが多く、また、その省略された要素が談話の話題 (topic) と関連していることが指摘されている (Hinds, 1987) ことから、この省略された要素の解釈が文章・談話全体を一貫したものとして理解できるか否かに少なからず影響を及ぼすと考えられる。

本研究では、この日本語談話中の省略要素の解釈が、異なる母語背景を持つ学習者の間で違いがあるかどうかを探る。母語の特徴が第二言語習得に影響することは、古くから指摘されてきた (Selinker, 1972/1983¹)。中間言語 (Selinker, 1972) の概念が導入されたあとも、母語の影響は、中間言語の形成に影響を与える要因のひとつとして捉えられてきた²。中間言語の発達段階を予測するために、学習者の産出データに現れる誤用を分析する誤用分析 (Corder, 1967/1983³, 1983) が多く行われたが、産出データのみを対象としていた誤用分析の限界も指摘されている (Schachter, 1974/1983⁴)。学習者は、誤用を避けるため、特定の項目の使用を回避することがあり、産出データに現れる誤用の分析だけでは、習得レベルを適切に反映しない場合があると Schachter は指摘した。省略習得に関しても産出データの分析が中心に行われてきたが、産出データに省略部分が現れないこと (つまり、その要素を明示的に産出しないこと) が、必ずしも省略の習得レベルを適切に示しているとは言えないとの考えのもと、本研究では、省略の「解釈」に焦点を当てる。

この「解釈 (理解)」における母語の影響を説明する考え方として、処理方略の転移 Processing strategies transfer (Harrington, 1987; Sasaki, 1994; Koda, 2005) の考え方を取り入れる。この考え方は、長い間、母語で経験してきたインプット処理を通じて、母語の言語的特徴に合った処理方略が形成され、その処理方略が L2 のインプットに対して自動的に活性化されるというものである。本研究では、この処理方略の転移が談話処理にも及ぶという報告をした Tao & Healy (1996, 2005) の研究をもとにして、日本語学習者の談話処理に母語の影響があるかを調べた。参加者には、中国語を母語とする学習者と英語を母語とする学習者を採用した。以下、第二言語学習者の省略使用に関する先

行研究、第二言語の理解に与える母語の影響について述べ、本研究の詳細ならびに結果を報告し、第二言語としての日本語談話処理方略に対する示唆を提示する。

1.1. 省略に関わる習得研究

言語が異なると、照応関係の表し方も異なる。例えば、英語のような言語では、文法的に代名詞の使用が義務的であり、明示的に照応関係を示す。一方、日本語の場合、一度談話に導入された要素は、省略されることが多く、通常、明示的には表わされない。また、この省略された要素は、談話の topic と関連していることから (Hinds, 1987 など)、第二言語としての日本語学習者にとって、この省略が正しく解釈できているかどうか、談話全体の理解に影響があるものと思われる。

これまで省略習得に関する研究は、学習者が目標言語で書いたり、話したりしたデータ (産出データ) を利用した研究が中心であった (Gundel & Tarone, 1983; Fuller & Gundel, 1987; Jin, 1994; Jung, 2004)。目標言語に英語を採用し、代名詞を使用しなければならないところで、省略してしまうという誤用の原因を探った研究が中心に行われた。Gundel & Tarone (1983) や Fuller & Gundel (1987) では、母語背景の異なる学習者の産出データを調べた結果、母語で省略を許すか否かが誤用の原因ではなく、学習者の言語はそもそも省略が多い体系 (一文中の語数が少ない) から目標言語である英語の体系に近づいていくのであり、それが誤用の原因であるとの説明がなされた。定名詞句、不定名詞句、代名詞などの使用に関して、Chaudron & Parker (1990) は、有標性差異仮説 (Eckman, 1977) の観点を取り入れている。有標性差異仮説とは、目標言語のある形式が言語類型論上で有標である場合は、学習者にとって習得が困難であると予測できるという仮説である。Chaudron & Parker は、言語的に複雑なものほど有標な形式であり、習得段階が遅く、反対に、省略は言語的に最も単純な形式、つまり、最も無標な形式であるから、習得段階は早いと主張している。しかし、のちに行われた研究では、この主張とは異なる結果が出ている。省略を許す言語を目標言語に設定した場合の研究である (Jin, 1994; Jung, 2004)。Jin は中国語を、Jung は韓国語を目標言語とし、それぞれ英語

母語話者の産出データを調べたところ、一番無標であるはずの省略の使用は少なく、日本語でいうところの「あなた」や「彼」「彼女」といったいわゆる代名詞⁵に相当する語が過剰に使用されていたと報告している。

このように、産出データを利用した研究では、目標言語での省略習得に母語の影響があるかどうかは、目標言語と母語の関係やその他の要因により、統一的な見解が出ていない。さらに、産出データを利用した場合、Schachter (1974) が指摘しているように、回避の現象が避けられない。これは誤用分析の限界を指摘したものであるが、使用そのものが少なければ、誤用が少なくなる現象で、省略に関しても同様のことが言える（省略すべき要素を省略せずに言ったとしても、不自然ではあるが、誤用とは言えない）。つまり、誤用を避けようとする意識が働けば、「言わなくてもよい」と分かっているにもかかわらず、とりあえず言うておくという行動につながり、その結果として得られた産出データは、学習者の省略習得のレベルを的確に反映しないという可能性がある。さらに、産出データでは、習熟度レベル以外の問題（時間的制約、不注意など）により、誤って省略してしまう現象も反映される。「本当は言いたかったが、言えなかった」が誤って「習得されている」に判定される可能性もある。

このように、省略習得に母語の影響があったとしても、産出データの分析だけでは、それを指摘するのは困難であるように思われる。学習者が母語の規則を適用し、省略すべきものを省略しなかった場合は、いわゆる負の転移を指摘できるかもしれない。その場合も、誤用を回避した結果である可能性もある。一方、母語で省略できるから日本語でも省略したといういわゆる正の転移に関しても、習熟度レベル以外の問題の関与を完全に排除することが困難である。このように産出データを利用した研究には限界がある。

以上のような理由から、省略の習得に母語の影響があるか否かは、「解釈」を調べる必要があると思われる。Tao & Healy (1996, 2005) は、中国語を母語とする英語の上級学習者と英語母語話者を対象に談話処理方略の転移（処理方略の転移については次節参照）を検証した。材料には英語の文章を使っている。ただし、その文章は、中国語に翻訳した際には省略される要素を全て取り除いたもので、英語としては非文法的な文が続いている文章である。参加者は、文章を読んで読解問題に答え、そのあと、その文章がどの程度読みやすいかを

7段階で判定した Tao & Healy は、この読みやすさの判定を Comprehensibility rating と呼んでいる。その結果、両グループに読解問題の正答率に差はなかったが、読みやすさに関して、中国語母語話者が文章に与えた評価は、英語母語話者の与えた評価に比べて統計的に有意に高かった。この結果をもとに、Tao & Healy は、中国語母語話者は、中国語の特徴に合った、談話を大きな単位から小さな単位へと処理する context-dependent な談話処理方略を持ち、一方、英語母語話者は文処理を基本とし、それを基本に大きな単位を処理する structure-dependent な談話処理方略を持っているとし⁶、それらの方略を活性化したことが Comprehensibility rating に現れた差の要因であると主張した。しかし、英語母語話者が低い評価を与えたのは、談話処理方略が異なっていたというよりは、文の非文法性によるところが大きいと思われる。そこで本研究では、この問題を避けるため、調査の参加者にとって L2 となる言語である日本語を採用した。さらに Comprehensibility rating に加え、それだけではわからない実際の処理方略を調べるため、短い談話を読んで、その中の省略要素を特定する同一指示タスクを実施した。

1.2. Processing Strategies Transfer

本研究は、学習者の理解の側面に母語の影響があるか否かに焦点をあてており、その母語の影響を説明する考え方として Processing strategies transfer を採用した。この考え方は、母語のインプットを処理する経験を長い間、積み重ねることで、母語の形式に相応しい処理方略が形成され、その処理方略が L2 のインプットに対し、自動的に活性化されるというものである。言語知識と言語処理スキルは、関連はあるが、異なる能力である (Koda, 2005:10) とする立場である。これまで、様々な言語で、検証が重ねられ、母語の文処理方略が L2 のインプットに対して活性化されることが確認されてきている (Bates & McWhinney, 1989)。

Harrington (1987) は、日本語母語話者と英語母語話者の文処理方略を調べ、日本語母語話者は、助詞、名詞の生きものかどうか (有生性) を利用した文処理方略を持ち、英語母語話者は、語順を利用した文処理方略を持つことを指摘した。そのうえで、日本語を母語とする英語学習者の英文処理方略を調べた。

その結果、日本語を母語とする英語学習者は、母語である日本語の文処理方略を活性化して文を処理していることがわかった。Kilborn & Ito (1989) や Sasaki (1994) でも同様の実験が行われ、同様の結果が得られている。同時に、母語の文処理方略の活性化は、習熟度の低い学習者に顕著に見られることも、併せて報告されている。さらに興味深いことに、日本語を母語とする英語学習者が文を解釈するときは、母語の特徴にあった処理方略がみられるが、英語の母語話者が、同様のテストを日本語で受けたとき、英語の特徴（語順）にあった処理方略がみられない場合があることが報告された。つまり、母語と言語の関係により、処理方略の転移は一方の母語話者には起こるが、反対には起こらないこともあるというのである。

英語同様に語順が重要な言語を母語とする学習者が、L2 文処理に母語の処理方略を使用する例が Koda (1993) に示されている。語順が重要である中国語の母語話者が日本語の文を解釈する際、その解釈は語順の影響を受けており、また、語順が重要でない韓国語の母語話者は日本語の文を解釈する際、語順の影響を受けないことが報告されている。これらの例は、学習者が目標言語のインプットを意図的・分析的に処理するのではなく、母語で積み重ねられたインプットの処理方略を即時的に適用し、つまり、母語の処理方略を自動的に活性化させてインプットを処理していることを示した検証結果である。

上述のとおり、学習者は母語の文処理方略を目標言語でも活用することが指摘されている。本研究では、母語の特徴に合った処理方略の自動的な活性化が、談話処理時にも起こるか否かを探ることを試みた。日本語談話の特徴である省略に着目し、母語で省略がある学習者と省略が制限的な言語を母語とする学習者では、その処理方略が異なるのかを探った。また、文レベルにおいて Processing Strategies Transfer が顕著に現れると指摘されている初級の学習者を採用して検証することとした。

2. 研究

2.1. 質問

本研究の質問は以下の二つである。

1. 省略を許す言語を母語とする学習者と省略を許さない言語を母語とする学習者が（省略を含む自然な）日本語の短い文章を読んだとき、学習者間で省略の解釈に違いがあるか。
2. 同じ学習者が、省略を含む自然な日本語の文章を読んだときと省略要素を復元した文章を読んだときでは、文章全体の読みやすさの判定に違いがあるか。

これらの質問に答えるために参加者ならびに材料を設定した。以下、順に説明する。

2.2. 参加者

本研究では、上記の質問に答えるため、異なる母語背景を持つ学習者グループを採用した。日本語同様に談話から復元可能な要素を省略できる言語の母語話者として、中国語母語話者5名（中国語グループ）を採用し、反対に、日本語とは異なり、省略を許さない言語の母語話者として英語の母語話者10名（英語グループ）を採用した。日本語と中国語は、言語類型上異なる分類に属すると考えられているが、話題卓越性 topic-prominence (Li & Thompson, 1976) の観点、主語省略 null-subject (Jaeggli & Safir, 1989) の観点で共通し、共に省略を多用する言語である (Tao & Healy, 1998) ことから、省略を許す言語の母語話者として中国語母語話者を選んだ。Tao & Healy (1996, 2005) で採用されたのと同じ母語背景の学習者を本研究でも採用することで、Tao & Healy の主張を検証する狙いがあったことも理由の一つである。中国語の母語話者は日本国内の日本語学校に、英語の母語話者は日本国内の大学附属日本語コースにそれぞれ所属しており、日本語の学習歴は、中国語グループが平均11.2ヵ月、英語グループが平均11.0ヵ月であった。習熟度レベルは、処理方略の転移が起こりやすいとされている初級の学習者を採用した。学習者の習熟度レベルの統制は、SPOT (小林ほか, 1996) B版と調査者の作成した読解テスト ($\alpha = 0.82$)⁷で行った。その結果、両グループ間に習熟度の差はなく、いずれも日本語能力試験3級レベルに相当することが確認された。統制テストに読解テストを用いたのは、研究手法として、読んで答えてもらう形式をとったため、文字を認識するなど一定の読む力が必要であるためと、極端に読解力の高い参

加者を排除するためである。

2.3. 材料

2.1で提示した質問に答えるため、2種類の材料を用意した。これらの材料は音声提示ではなく、Tao & Healy (1996, 2005) に倣い、文字を読んで答える方法を採用した。まず、質問1に応えるため、「同一指示タスク」8問を用意し、質問2に答えるために、Tao & Healy 同様、Comprehensibility rating 二つを用意した。Tao & Healy (1996, 2005) で採用された Comprehensibility rating は、省略が制限的な英語を材料に使用しており、中国語に翻訳した際には省略される要素を全て取り除いた英語の文章であった。本研究では、省略を許す日本語が材料であるため、自然な日本語の文章には、省略が含まれる。そこで、自然な日本語の文章と、省略要素を復元した日本語の文章を用意した。

いずれのタスクも、日本人大学生によるストーリー再生データ、初級日本語教材、調査者の作例によりタスク本文を作成した。その後、日本語を母語とする言語系分野の大学院生6名がスクリーニングを行った。スクリーニングでは、同一指示タスク8問の省略要素の解釈が一致するか否か、Comprehensibility rating に使用した文章中の復元要素は正しいか否かを判定してもらった。

また、設問に関しては、参加者が初級の学習者であることを考慮し、学習者の母語（中国語母語話者には中国語、英語母語話者には英語）で行った。設問の指示も、それぞれの母語話者に適切かどうか確認をしてもらった。以下、それぞれの材料を大学院生によるスクリーニングの結果と併せて説明する。

2.3.1. 同一指示タスク

同一指示タスク8問は、3～5文からなる短い文章を読んで、文章の最後の文にある省略要素を答えるタスクである。これらの文章では、文章の始まりにあたる文（以下、「談話始発文」と呼ぶ）に現れた要素が、次に続く文ではすでに省略されており、その後、最後まで現れることはない。文章を読み終えたあと、最後の文に含まれている省略要素を尋ねる質問に答えてもらった。下に例を挙げる。

同一指示タスクの例 (英語版) :

おじさんが 木^き の 上^{うえ}で りんごを 取^とっています。木^きの 上^{うえ}に 上^あがって 取^とって、エプロンの ポケットに 入^いれて、下^{した}に 下^おりてきて、かごに 入^いれています。おじさんは、二^{ふた}つのかごを いっぱいに して、三^みつ目^めのかごに 入^いれて います。

(入れる = put something into)

Q: What is he putting into the third basket?

a. I have no clue to identify it.

b. ()

この文章では、談話始発文に「取っているもの」、つまり「りんご」が現れるが、次の文で「入れているもの」はすでに省略され、最後の文においても、三つ目のかごに入れているものは何か明示されていない。同一指示タスクは、この最後の文で省略されているものを参加者に特定させるタスクである。参加者は先行する文脈にその同一指示対象を求めることになる。

この例の正答は「りんご」であるが、その根拠は、大学院生6名によるスクリーニングの結果をもとに決定した。大学院生6名が全員一致した解釈を正答とし、全8問中6問の省略要素については、全員解釈が一致した。残り2問は、スクリーニングで省略要素を特定できないという回答が多く得られた問題であったが、本研究では、解釈が正しいか否かということよりも、どのような解釈を行っているかを見ることが主眼であったため、この2問も問題の中に含めた。しかし、実際の参加者が、答えがわからずいい加減に答えるのをさけるため、回答方法に「特定できない」という選択肢を与えた。

問題本文は、単語認識に関わる負担を軽減するために分かち書きで提示し、文章理解を行いやすくした。語彙レベルは、日本語能力試験の3級レベル、参加者の漢字の知識が回答に影響しないよう、ふり仮名を付けた。これは、単語は知っているが、漢字が読めないために理解できないという参加者がいた場合のための配慮である。

2.3.2. 読みやすさの判定 (Comprehensibility rating)

読みやすさの判定には二つの文章を用意した。文章一つに対して、自然な日本語の文章 (オリジナル) と省略要素を復元した文章 (復元版) の2種類ずつがあり、合計四つの文章を用意した。さらにタスクの途中に読む文章 (オリジナル) を一つ用意した。それぞれの文章を読んで、ページをめくると、内容に関する設問が一つあり、それに答えたあと、読みやすさについて7段階で評価してもらった (1が最も読みにくい、7が最も読みやすい)。参加者には、内容理解を目的とした読みを促すために、ページをめくると設問があることを事前に指示した。

文章には、初級教材を利用した。参加者の漢字の知識が文章の読みやすさの評価に影響するのを避けるため、文章を全てひらがなに書き換え、分かち書きにした。全てひらがなにしたこと、内容語と助詞の区別がつきにくくなったことから、それらの間にもスペースを加えた。語彙レベルは、日本語能力試験3級レベルに制限した。以下に例をあげる。

Comprehensibility rating の例 (オリジナル英語版) :

ともだち の たなかさんが アメリカじんと はなし が したい というので、きのう の よる、ともだち の ホワイトさんと テイラーさんを ゆうしょくに よんだ。たなかさんは ナイフ や フォーク の つかいかた は じょうず だが、スープ を のむ ときに、おと を たてて のんだ。そして、さいご に くち を つけて のんだ。ホワイトさんと テイラーさんは へんな かお を していた。また、しお が ホワイトさんの まえ に あった のに、たのまないで、たって とった。それから、テイラーさんが たべている のに、て を のばして さとう を とっていた。

(設問と読みやすさの判定タスク)

Q: How many people appear in this story including the writer?

Circle your answer. [three four five]

Comprehensibility rating

1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7
completely incomprehensible completely comprehensible

復元版は以下に示すとおりである。省略要素の復元に際しては、日本語を母語とする大学院生に復元要素が正しいかという観点でスクリーニングしてもらった。自然な日本語には明示的に存在しない要素を復元してあるため、読んだ際に不自然さを感じると報告があったが、省略要素の復元が正しいかという点では全員一致した。復元版を以下に示す。

Comprehensibility rating の例 (復元版) :

わたし の ともだち の たなかさん が アメリカ人 と はなし が したい と いう ので、きのう の よる、わたし の べつ の ともだち の ホワイトさん と テイラーさん を ゆうしょく に よん だ。たなかさん は ナイフ や フォーク の つかいかた は じょうず だが、たなかさん が スープ を のむ とき、たなかさん は おと を たて て スープ を のん だ。そして、さいご に たなかさん は スープ の カップ に くち を つけて スープ を のん だ。ホワイトさん と テイラーさん は へんな かお を して いた。また、しお が ホワイトさん の まえ に あつた のに、たなかさん は、ホワイトさん に たのま ないで、たつて しお を とつた。それから、テイラーさん が たべて いる のに、たなかさん は て を のば して さとう を とつて いた。

下線部が復元された要素である。実際の材料には、この下線部はない。上で説明したように、この復元版を読んで、ページをめくると内容に関する設問があり、その設問に答えたあと、読みやすさを同様の手順で判定してもらった。実

際のタスク全体の流れは2.4で説明する。分析の対象にした二つの文章（文章（A）、（B）と呼ぶ）の詳細は、以下の表 1 に示すとおりである。文章のタイプは、オリジナルか復元版か、文字数は、ひらがなとカタカナの総数を表している。同様に、登場人物の数、話題を示す。

表 1. Comprehensibility rating に使用した材料

文章	文章タイプ	文字数	登場人物の数	話題
文章 (A)	オリジナル	237	4	ある日本人の テーブルマナー
	復元版	290		
文章 (B)	オリジナル	276	2	ある日本人の 母親の描写
	復元版	311		
文章 (C)	オリジナル	197	1	ある日本人の一日

note. 文章 (C) はオリジナルのみ

2.4. 手順

参加者には、それぞれの通常授業時間外に調査に協力してもらった。調査は、中国語グループが2007年8月、英語グループが2007年7月に、3～5名ずつの小グループで実施し、全て調査者立会いのもとに行われた。実際のタスク実施手順は全体で約80分を要した。

文章 (A) は復元版を先に提示し、オリジナルをあとから提示した。文章 (B) は、オリジナルを先に提示し、復元版をあとから提示した。復元版を読んだからオリジナルを読むまでの間 ((B) の場合はオリジナルを読んだから復元版を読むまでの間) に同一指示タスクと学習歴に関するアンケートを実施し、さらに、文章 (C) を読む過程が入っている。これは、(A) の場合も (B) の場合も、話そのものには違いがなく、2回目に読んだ方が、内容理解の面で読みやすくなってしまいうために、その影響を極力避けるために間に複数のタスクを入れたものである。

1. 同意書
2. 統制テスト 2 種類
3. 文章 (A) 復元版
4. 文章 (B) オリジナル
5. 同一指示タスク 8 問
6. 学習歴などに関するアンケート
7. 文章 (C) オリジナル
8. 文章 (A) オリジナル
9. 文章 (B) 復元版

※上記の文章 (A)、(B) などの記号は内容が同じことを指し、それぞれ、オリジナルと復元版がある。

2.5. 分析方法

本研究の質問のひとつは、省略された要素の解釈傾向を調べることであった。その方法として同一指示タスクを採用し、その解釈傾向を探った。正答するかどうかは中心的問題ではなかったが、正答率も算出した。正答の判断は、大学院生 6 名のスクリーニングで全員一致した要素を正答とし、スクリーニングで統一した解釈が得られなかった問題は正答率の算出から除外した。解釈傾向に関しては、文章の一番初め、つまり、談話始発文に現れる要素を省略要素と同一であると解釈しているか、それとも、質問されている省略要素が含まれる文の直前の文（先行隣接文（節））に現れる要素を省略要素と同一の要素と解釈しているか、という観点を中心に分析した。グループごとの実際の選択を回数で算出し、グループ間の差について Fisher's Exact test を行った。

Comprehensibility rating は、オリジナルと復元版で読みやすさに違いがあるかという観点から分析を行った。同一参加者が、オリジナルと復元版で異なる評価を与えるか、その場合のどの程度の違いがあるかという点が問題となる。そこで、分析には対応のある t 検定を行った。

3. 結果

3.1. 同一指示タスクの結果

用意した同一指示タスク8問のうち、日本語母語話者の解釈が一致した6問の正答率を示したものが表2である。Q4とQ7は母語話者に一致した解釈が得られなかった項目であり、正答率は算出していない。中国語グループの場合は5人がそれぞれ、6問に答えたので、全体の正答率は30問に対して算出し、英語グループ(10名)の全体の正答率は同様の計算で60問に対しての正答率を算出している。表中の実数は正解者数でその右側にそれぞれのグループに対する百分率を、括弧で示した。

結果をみると、Q2などのように、両グループとも正答率が高い項目(中国語グループ、英語グループともに80%)や、反対にQ5のように共に正答率の低い項目(両グループとも20%)もあったが、全体の正答率をみると、中国語グループが56.6%、英語グループが36.6%と全体的に中国語グループのほうが省略要素の解釈については、日本語母語話者に近い解釈をしているように見受けられる。

表 2. 同一指示タスクの正答率

	中国語グループ (N=5)	英語グループ (N=10)
Q1	4 (80%)	3 (30%)
Q2	4 (80%)	8 (80%)
Q3	4 (80%)	2 (20%)
Q5	1 (20%)	2 (20%)
Q6	4 (80%)	3 (30%)
Q8	0 (0%)	4 (80%)
Total	17/30(56.6%)	22/60(36.6%)

note. 母語話者から一致した解釈が得られなかった項目 Q4 と Q7 含めていない。

実際にどのような要素を省略要素と同一であると解釈しているかを示したものが表3である。談話の最後に現れる省略要素と同一と解釈されるものを談話全

体から選ぶのであるが、特に、談話始発文に現れる要素と同一であると解釈しているか、先行する隣接文に現れる要素と同一であると解釈しているかが興味を中心となる。この選択傾向をみることで、どのような要素を省略要素と同一であると解釈しているかがわかる。参加者の回答が正答か否かに関係なく、すべての回答の傾向を表している。したがって、正答率の計算からは除外したQ4, Q7も、ここには含まれている。合計8問で中国語グループは5名だったので、グループ全体として合計で40回の選択機会があり、同様に英語グループ（10名）は全部で80回の選択機会があったことになる。このようにグループ全体の選択傾向を回数でまとめ、同時に全体に占める百分率もそれぞれ下に示した。表中に「その他」の項目があるが、これは、提示した談話が5文あった場合など、談話始発文でも、先行隣接文でもない文中に現れる要素を省略要素と同一であると判断したケースである。

表 3. グループ別にみた省略要素の解釈

	談話始発文 の要素	先行隣接文 内の要素	その他	特定できない	計
中国語グループ (N=5)	17 43%	10 25%	1 3%	12 30%	40 100%
英語グループ (N=10)	20 25%	46 58%	7 9%	7 9%	80 100%

中国語グループは、談話始発文の要素を省略要素と同一であると解釈しているケースが43%となっており、英語グループ25%に比べて高くなっている。反対に先行隣接文中の要素が省略要素と同一であると判断するケースは25%で、英語グループの58%に比べて低い。同時に、特定できないと答えたケースも多い。これは、判断するには、コンテキストが足りないという判断なのだろうか。

一方、英語グループは、先行隣接文の要素を省略要素と同一であると判断するケース（58%）が半数を超えて高い。この先行隣接文内の要素を選択した回数が統計的にどのような意味を持つか調べるために、談話始発文の要素、先

行隣接文の要素に限って、Fisher's Exact Test で調べた。その結果、統計的有意差 ($p = .004$ 片側) が得られた。

3.2. Comprehensibility rating の結果

Comprehensibility rating の結果は、まず、二種類の文章 (A) と (B) の結果を合計して統計処理した結果から提示する。文章がオリジナルのときと復元版のときで参加者がどのように評価を変えたかがわかる。まず、中国語グループの結果から提示し (表 4)、続いて英語グループの結果を提示する (表 5)。

中国語グループが復元版に与えた読みやすさの評価の平均値は、オリジナルに与えた評価の平均値5.3に比べて0.8ポイント低く4.5であった。そして、対応のある t 検定の結果、その差には統計的有意差がみられた ($t=4.00$, $p=0.003$)。

表 4. 中国語グループの結果

	<i>mean</i>	<i>SD</i>	<i>mean difs.</i>	<i>t</i>
オリジナル	5.30	0.95		
復元版	4.50	1.17	0.8	4.00**

※文章 (A)+(B), N=10 (文章2種類×参加者5名)

** $p < 0.01$

一方、英語グループは、オリジナルの読みやすさの評価の平均値も復元版の読みやすさの評価もともに6.1ポイントで違いがなかった。対応のある t 検定で調べてみたところ、英語グループは、各個人がそれぞれの文章に与えた評価に差がないことがわかる。つまり、省略の有無が文章の読みやすさに影響を与えていないことがわかる。

表5. 英語グループの結果

	<i>mean</i>	<i>SD</i>	<i>mean difs.</i>	<i>t</i>
オリジナル	6.10	0.79	0.0	0.00
復元版	6.10	0.91		

※文章 (A)+(B), N=20 (文章2種類×参加者10名)

さらに、文章 (A) (B) ごとの読みやすさの評価を算出したものを表6 (中国語グループ) と表7 (英語グループ) に示す。

表6. 文章別の結果 (中国語グループ)

	<i>mean</i>	<i>SD</i>	<i>Mean difs.</i>	<i>SD difs.</i>	<i>t</i>	<i>df</i>
文章 (A) オリジナル	4.80	0.84	1.00	0.71	3.16*	4.00
文章 (A) 復元版	3.80	0.84				
文章 (B) オリジナル	5.80	0.84	0.60	0.55	2.45	4.00
文章 (B) 復元版	5.20	1.10				

* $p < 0.05$

中国語グループでは、文章 (A) のオリジナルの平均値が4.8で、復元版が3.8と1.0ポイントの差があり、対応のある t 検定の結果、5%水準での有意差が確認された ($t=3.162$, $p=0.034$)。同様に文章 (B) のときの結果をみるとオリジナルが5.8、復元版が5.2と、文章 (B) の場合も、復元版を読みにくいと判定している。統計的には有意差はみられなかったが ($t=2.449$, $p=0.07$)、中国語グループの場合は、どちらの文章を読んだ場合でも、共通して復元形のほうが読みにくいと判断している。特に、文章 (A) を読んだときの復元版に対する評価が低くなっているのがよくわかる。平均値で1.0ポイントの差がある。この原因については、のちに考察を加えたい。

表7. 文章別の結果 (英語グループ)

	<i>mean</i>	<i>SD</i>	<i>Mean difs.</i>	<i>SD difs.</i>	<i>t</i>	<i>df</i>
文章 (A) オリジナル	5.90	0.88				
文章 (A) 復元版	5.70	0.95	0.20	0.79	0.80	9.00
文章 (B) オリジナル	6.30	0.68				
文章 (B) 復元版	6.50	0.71	-0.20	0.42	-1.50	9.00

英語グループの場合は、オリジナルの文章を読んでも、復元版を読んでも、読みやすさの評価に大きな差はなく、統計的にも有意差はみられなかった。文章 (A) のオリジナルの平均値が5.9、復元版が5.7で、文章 (B) のオリジナルの平均値が6.3で復元版が6.5であった。文章 (A) のときは復元版のほうが数値が低く、文章 (B) の場合はオリジナルのほうが低い。一貫していないが、統計的にはどちらの数値も有意差はないと判断された。

4. 考察

本研究が掲げた質問は以下の二点である。ここで再度示す。

1. 異なる母語話者グループの間で日本語談話に含まれる省略要素の解釈が異なるか否か。
2. 自然な日本語の文章を読んだときと省略要素を復元した文章を読んだときでは、文章全体の読みやすさの評価に違いがあるか。

上の質問1に答えるため、同一指示タスクを実施し、質問2に答えるため、Comprehensibility rating を実施した。それぞれ得られた結果をこれまでの先行研究をふまえながら検討を加える。

4.1. 省略要素の解釈の違い

本研究の質問1に答えるため、同一指示タスクを実施し、得られた結果をみると、中国語グループの場合、省略された要素と談話始発文に現れる要素を同一と解釈する傾向がみられた。英語グループの方は、省略要素のある文の直

前である先行隣接文内の要素を省略要素と同一と解釈している場合が半数を超え、中国語グループに比べて統計的に有意に多かった。この結果から判断する限り、母語の違いによって、省略された要素の解釈が異なるといえる。Tao & Healy (1996, 1998, 2005) は、一連の研究で、中国語母語話者は context-dependent な談話処理方略を持ち、英語母語話者は、structure-dependent な談話処理方略を持っていると述べ、その処理方略は、L2 での談話処理にも適用されると主張した。中国語の母語話者が大きな単位から小さな単位へと談話を処理するのであれば、今回のように談話始発文で表わされている内容を反映したコンテクストをもとに、それに合うように省略要素を解釈しているという説明となる。今回の同一指示タスクから得られた結果では、実際に談話始発文中の要素を談話の最後に現れる省略要素と同一と解釈する傾向が顕著にみられ (43%)、統計的にも立証された。これは、談話がひとまとまりであるために必要な解釈を行ったと考えられる。また、中国語母語話者が、設問に対して、「特定できない」と答えた割合が非常に高かったこと (30%) も、特定するには、文脈が足りない、ひとまとまりの談話として処理したいが、文脈が足りないと判断した結果なのかもしれない。この点については、日本語母語話者のデータとの比較を行うなどして、今後、考察を深めたい点である。

一方、英語母語話者の場合、省略のある文に先行する隣接文中の要素を省略要素と同一と解釈する処理方略の使用が顕著であった (58%)。省略要素を特定する際に、先行する文との結束性を求め、その結果、省略要素のある箇所から近いところに同一指示関係を探索したことがわかる。文に表されている内容をもとに、少しずつ、大きな単位へと処理を行い、最終的に談話全体を処理するという方略を使用していると考えられる。これは、Tao & Healy の主張した structure-dependent な処理方略と考えられ、それを L2 である日本語の談話処理に利用した可能性が高い。

以上をまとめると、同一指示タスクの結果では、中国語母語話者が L2 である日本語の省略復元に際して、context-dependent な処理方略を用い、英語母語話者が、structure-dependent な処理方略を用いたと考えるのが妥当な結果となった。グループ間で省略解釈の傾向が異なるという結果は、Processing strategies transfer の関与する可能性を示唆するものといえよう。しかし、

Processing strategies transfer の関与については、より綿密な研究で、さらに追及していく必要であろう。なぜなら、今回は、読んで答えるという形式で、調査を行ったが、これは同時に、ゆっくりと時間をかけて意図的に省略要素の解釈を行うことが可能となる。Processing strategies transfer により、省略要素を解釈していると判定するには、それが、インプットに対して自動的処理、つまり、即時的であり意図的・分析的でない処理である必要がある。そこで、今回の実験条件とは異なる方法、意図的処理を行う時間的余裕のない状況での検証が、今後、必要であろう。

4.2. 読みやすさの違い

質問2には、母語での談話処理方略の違いがL2の談話を読んだときにどのような影響を与えるかを調べるために、「省略を含む自然な文章を読んだときと省略を復元した文章を読んだときでは、文章の読みやすさに違いがあるか。」という質問を設定した。この質問に答えるため、参加者には、省略を含む自然な日本語の文章と省略要素を復元した文章を読んでもらい、その読みやすさを7段階で判定してもらった。その結果、中国グループは、復元された文章の方が自然な日本語の文章を読んだときに比べ、読みにくいと判定し、その差は統計的にも有意であった。一方、英語グループは、省略の有無が文章の読みやすさの判定に影響を与えないことがわかった。

文章別に結果をみても、中国語グループは、文章(A)を読んだとき、復元版のほうを5%水準で有意に読みにくいと判定した。文章(B)のときも有意傾向ではあるが、復元版のほうを読みにくいと判定しており、一貫して復元版を読みにくいと判定している。これに対して、英語グループは、文章(A)、(B)、いずれの場合も、オリジナルと復元版の評価はほとんど同じであった。

中国語グループがこのように、一貫して復元版に低い評価を与えた要因としては、やはり、母語の影響が考えられよう。中国語は省略を許す言語であり、復元版を読んだ際に、省略されるべき要素が復元されており、読みにくさにつながったと考えられる。中国語にしたときに省略される要素を取り除いた英語の文章を、中国語の母語話者が読んで、(英語母語話者に比べ)読みにくさを感じなかったという Tao & Healy (1996, 2005) の報告と、今回の復元版を読

んで、読みにくいと判定したという二つの結果から、中国語母語話者は母語の省略を許すという特徴に合った談話処理の方略をL2に対しても使用していると考えられる。

しかし、本研究の結果の解釈において注意しなければならない点がある。それは、被験者が少ないために、実施上、十分なカウンターバランスが取れていないことである。文章(A)は、復元版を先に読んで、オリジナルをあとから読んでいる。内容が同じことから、二回目に読んでいるオリジナルを読みやすく感じて、高い評価を与えている可能性も考えられる。しかし、文章(B)の場合は復元版をあとから読んでいるにもかかわらず、オリジナルに比べて読みにくいと判定している。つまり、いくぶんの学習効果があったかもしれないが、一貫して復元版に低い評価を与えているのである。省略の有無が読みやすさに影響を及ぼしていると考え、母語の影響と考えるのが妥当ではなかろうか。

一方、英語グループでは、オリジナル、復元版のいずれを読んだときも、評価に差がみられなかった。母語の影響があるとすれば、なんらかの違いがみられると予測されたが、実際には、差はみられなかった。この原因として考えられるのが、本研究が採用した材料の問題である。文章の読みやすさを7段階で評価してもらったのだが、文章(A)に与えた評価の平均値がオリジナルで5.9、復元版で5.7、文章(B)に与えた評価の平均値がオリジナルで6.3、復元版で6.5と非常に高くなっており、一種の天井効果のような現象がみられた。提示した文章そのものが、易しすぎた可能性もある。今後、異なる難度の文章で同実験を行い、今回の結果を検証してみる必要があるだろう。また、読解時間に制限を加えるなど今回とは異なる手法で検証することも意義があると思われる。

5. 結論

本研究では、中国語を母語とする日本語学習者と英語を母語とする日本語学習者の間で、日本語談話中の省略の解釈が異なるかどうかを検証した。実施した同一指示タスクの結果から、中国語母語話者は、談話始発文に現れる要素を省略の要素と解釈する傾向が強く、英語話者は、省略の含まれる文に近いところに同一指示対象を求める傾向がみられた。さらに、同時に実施した

Comprehensibility rating の結果では、省略を含む自然な日本語と省略要素を全て復元した日本語を読んだとき、中国語母語話者の場合のみ、省略を含む自然な日本語談話の方を読みやすいと感じていることが分かった。これらの結果は、中国語母語話者の談話処理方略は context-dependent であり、英語母語話者のそれは structure-dependent であり、その処理方略は、L2 での談話処理にも使用されると報告した Tao & Healy (1996, 2005) の主張を裏付けるものであるといえよう。

しかしながら、本研究では、調査に参加した人数が少なく、一般化できるような結果とはなりえない。今後、多くの参加者による調査が必要である。また、その際は、異なる習熟度レベルの学習者を採用し、談話レベルでの Processing strategies transfer が初級の学習者に特に顕著に見られる現象なのか、他のレベルの学習者にもみられる現象なのか、また、どの習熟度レベルになると、目標言語である日本語に適した談話処理方略を習得するのかなども研究の対象となってこよう。同時に、今回は、中国語を母語とする学習者と英語を母語とする学習者のみを対象としたが、今後は、その他の言語を母語とする学習者を採用することが必要となろう。例えば、省略を許す言語を母語とする別の学習者（例えば、韓国語母語話者）グループを採用し、今回の中国語母語話者と同様の結果が得られれば、談話処理においても母語の影響があることを示す更なる証拠になると思われる。

また、今後、材料・手法などを整備して、調査する必要もあるだろう。まず、同一指示タスクの質や数の問題である。今回は、日本語母語話者による発話データをもとに同一指示タスクの多くを作成した。そのため、文中で省略が現れる位置やそれが文中で果たす役割について偏りなどがあった可能性がある。より体系的に、そして、より日本語母語話者の処理方略に合ったテストを作成し、調査することも必要だと考える。また、今回の手法（読んで答えさせる手法）では、学習者に時間的余裕を与えてしまい、学習者の意図的・分析的活動が結果に反映されてしまった恐れがある。今後は、提示時間を制限する、音声提示するなどの方法も検討すべきであると思われる。本来、談話の省略は、話しことばに多くみられる現象である (Hinds, 1987 など) ことから、学習者が省略

解釈を迫られる環境は話しことばをインプットとして受ける場合であろう。この点を考慮に入れると音声提示でのテストも大きな意味を持つであろう。それにより、学習者がどのような談話処理方略を持っているかが明らかになっていくだろう。このような研究を続けることで、L2学習者の理解の側面が見えてくるものと思われる。

さらなる研究が進むことで、教師が、自ら担当する学習者がどのように省略を解釈しているかということに対する理解が進み、適切な省略復元の指導が行えるようになると思われる。今後、第二言語としての日本語学習者の省略解釈ならびにインプット処理の多くの側面が明らかになっていくことを期待している。

謝辞

本稿は、2008年3月に、神田外語大学大学院言語科学研究科に提出した修士論文 *Interpreting Zero Anaphora in Japanese as a Second Language for English and Chinese Learners* を和訳し、加筆・修正したものである。ご指導くださった小林美代子教授に、この場を借りて改めて感謝申し上げたい。また、同大学院の先生方、先輩方、ならびに、Robert DeSilva 教授からも貴重なコメントをたくさんいただいた。ここにお礼を述べたい。

注

- 1 オリジナルが1972年に出版され、1983年に別の出版社より再出版された。筆者が入手したものは再出版されたものであるが、これ以降、本稿で言及する際は、1972年を記す。
- 2 Selinker (1972) は、中間言語の形成に影響を与える要因として、母語の影響のほかに、過剰般化、指導上の転移、学習ストラテジー、コミュニケーション・ストラテジーの四つを挙げている。(Selinker, 1972, 1969/1983)
- 3 オリジナルが1967年に出版され、1983年に別の出版社より再出版された。筆者が入手したものは再出版されたものであるが、これ以降、本稿で言及する際は、1967年を記す。
- 4 オリジナルが1974年に出版され、1983年に別の出版社より再出版された。筆者が入手したものは再出版されたものであるが、これ以降、本稿で言及する際は、1974年を記す。
- 5 「あなた」「彼」「彼女」といった語は英語の代名詞と同じような働きをするわけではないことが指摘されている(例: Hinds (1987) など)。
- 6 Context-dependent と structure-dependent の区別は、Aaronson & Ferres (1986) で指摘

されている。彼らによると、中国語では、定名詞句と不定名詞句を形態素などで示さずに文脈情報を利用すること、代名詞が少なく、また、その使用は任意であり、省略された場合、その解釈は文脈情報を利用すること、topicが焦点になること (Aronson & Ferres, 1986: 157)などが context-dependent な言語の特徴であると指摘している。一方、英語に関しては、代名詞システムのように一つ一つの単語が持つ情報に依存した処理方略であるとしている。

7 この信頼度は本研究の参加者のみではなく、中国語、英語以外の母語話者を含む合計19名で行った結果である。

参考文献

- Aronson, D. & Ferres, S. (1986). Sentence processing in Chinese-English bilinguals. *Journal of Memory and Language*, 25, 136-162.
- Bachman, L. F. (1990). *Fundamental considerations in language testing*. Oxford: Oxford University Press.
- Bates, E. & McWhinney, B. (1989). *The cross-linguistic study of sentence processing*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Canale, M. & Swain, M. (1980). Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing. *Applied Linguistics*, 1 (1), 1-47.
- Chaudron, C. & Parker, K. (1990). Discourse markedness and structural markedness: The acquisition of English noun phrases. *Studies in Second Language Acquisition*, 12(1), 43-64.
- Corder, S. P. (1967/1983). The significance of learner's error. In J. C. Richards (Ed.), *Error analysis: Perspectives on second language acquisition* (pp. 19-27). London: Longman.
- Corder, S. P. (1983). A role for the mother tongue. In S. Gass & L. Selinker (Eds.), *Language transfer in language learning* (pp. 85-97). Rowley: Newbury House.
- Eckman, F. (1977). Markedness and the contrastive analysis hypothesis. *Language Learning*, 27, 315-330.
- Fuller, J. & Gundel, J. K. (1987). Topic-prominence in interlanguage. *Language Learning*, 37 (1), 1-18.
- Gundel, J. K. & Tarone, E. (1983). "Language transfer" and the acquisition of pronominal anaphora. In S. Gass & L. Selinker (Eds.), *Language transfer in language learning* (pp. 87-100). Rowley: Newbury House.
- Harrington, M. (1987). Processing transfer: Language-specific processing strategies as a source of interlanguage variation. *Applied Psycholinguistics*, 8, 351-377.
- Hinds, J. (1987). Thematization, assumed familiarity, staging, and syntactic binding in Japanese. In J. Hinds, S. Iwasaki & S. K. Maynard (Eds.), *Perspectives on topicalization: The case of Japanese 'wa'* (pp. 83-106). Philadelphia: John Benjamin.

- Jaeggli, O. & Safir, K. J. (1989). The null subject parameter and parametric theory. In Jaeggli, O. & Safir, K. J. (Eds.), *The Null Subject Parameter*. (pp. 1-44). Boston: Kluwer Academic Publishers.
- Jin, H. G. (1994). Topic-prominence and subject-prominence in L2 acquisition: Evidence of English-to-Chinese typological transfer. *Language Learning*, 44 (1), 101-122.
- Jung, E. H. (2004). Topic and subject prominence in interlanguage development. *Language Learning*, 54 (4), 713-738.
- Kilborn, K. & Ito, T. (1989). Sentence processing strategies in adult bilinguals. In B. MacWhinney & E. Bates (Eds.), *The crosslinguistic study of sentence processing* (pp. 257-291). Cambridge: Cambridge University Press.
- 小林典子・フォード丹羽順子・山元啓史 (1996). 「日本語能力の新しい測定法 [SPOT]」『世界の日本語教育』6号, 201-218.
- Koda, K. (1993). Transfer L1 strategies and L2 syntactic structure in L2 sentence comprehension. *The Modern Language Journal*, 77 (4), 490-499.
- Koda, K. (2005). *Insights into second language reading: A cross-linguistic approach*: Cambridge: Cambridge University Press.
- Li, C. & Thompson, S. (1976). Subject and topic: new typology of language. In Li, C. (Ed.) *Subject and topic* (p. 457-489). London/New York: Academic Press.
- Sasaki, Y. (1994). Paths of processing strategy transfers in learning Japanese and English as foreign languages. *Studies in Second Language Acquisition*, 16 (1), 43-72.
- Schachter, J. (1974/1983). An error in error analysis. In B. W. Robinett & J. Schachter (Eds.), *Second language learning: Contrastive analysis, error analysis, and related aspects* (pp. 354-362). Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- Selinker, L. (1969/1983). Language transfer. In M. Gass & L. Selinker (Eds.), *Language transfer in language learning* (pp. 33-53). Rowley: Newbury House.
- Selinker, L. (1972/1983). Interlanguage. In J. C. Richards (Ed.), *Error analysis: Perspectives on second language acquisition* (pp. 19-30). London: Longman.
- Selinker, L. (1969/1983). Language transfer. In M. Gass & L. Selinker (Eds.), *Language transfer in language learning* (pp. 33-53). Rowley: Newbury House.
- Tao, L. & Healy, A. (1996). Cognitive strategies in discourse processing: A comparison of Chinese and English speakers. *Journal of Psycholinguistic Research*, 25 (6), 597-616.
- Tao, L. & Healy, A. (1998). Anaphora in language processing: transfer of cognitive strategies by native Chinese, Dutch, English, and Japanese speakers., In A. Healy & L. E. Bourne (Eds), *Foreign language learning : Psycholinguistic Studies on Training and Retention* (pp.193-211). Mahwah: Lawrence Erlbaum.
- Tao, L. & Healy, A. (2005). Zero anaphora: Transfer of reference tracking strategies from Chinese to English. *Journal of Psycholinguistic Research*, 34 (2), 99-131.